

目を閉じて、みんなで息を吸う

早川町立早川中学校一年 上原 梅音

環境正義。私はその言葉を父から聞いた。誰もが公平に扱われて、安全な環境に過ごせる権利を追求する考えだ。ネイティブアメリカンの保留地域で放射性物質の開発が行われていた、とどこかで聞いた記憶がある。ひどいけれど、それは何となく異国でのこと。そのため私たち家族が環境正義という人権問題の当事者だったなんて、思ってもいなかった。

四年前の春、私たち家族は愛媛県から山梨県に引っ越してきた。引っ越しを決めた理由は、風車だ。

今、二酸化炭素の排出が世界中に悪影響を与えており、温暖化が進み、多くの動植物の命を奪っている。そのため、脱炭素社会が推奨されている。六年生の時、自然の力をそのまま利用した水力発電や風力発電のすばらしさをつづったコラムが社会科の教科書にあった。複雑な気持ちだった。

風力発電のための巨大な風車には、低周波音という、普通、人には聞こえない音を発する特性がある。大きなうねりの空気振動を知らずに感じ、頭が痛かったり、夜眠れなかったりと、人の健康に害を与えることがあるそうだ。実際に長年悩まされていたおばあさんが涙目で話していたことを思い出した。

その風車が、当時私が進学したばかりだった小学校の真上に立つという。風車を立てるために山を大きく削る。山の下には、愛媛の美しい、ずっと見ても飽きることのない段々畑と人々が暮らす集落がある。それが何だか悲しかったし、山が山としての働きを損ない、生態系が崩れ、海にも悪影響を及ぼす。何より、小学校に通う子どもたちの健康には絶対に害を与えたくない。そんな父は、風車を立てることでどうなるのかを正しく伝えようと尽くした。そのことについて勉強して、体験者に会って話を聞いて、できる限りの勉強会を開いて。その時父は走り回っていた。母も、私が通っていた学童に迎えに来て、そのまま協力してくれる知り合いの家で何やらずっと作業をしていることがあった。しかし、どうにもならず、結局風車は立てられることになったのだ。

はじめて聞いたことではなかったが、改めてはじめてから聞き直して、なんで、私たちが親しんだ土地を離れなくてはいけなかったのだろう、なんで辛い思いをしたのが父と母だったのだろうという、怒りが込み上げてきた。山梨での暮

らしは、とてもすてきだ。でも私は事情をのみ込めないまま大好きな先生や幼馴染みと別れなければならなかったのだ。

だからといって、風車を立てたことを、非難するつもりはない。地域の土地主さんが土地の売買を必要としていたかもしれない。電気がこの社会でとにかく必要とされていたかもしれない。でも、風車を立てることにデメリットもあった。そして、その被害を受ける可能性があるのは地元の人たち、そして何も知らない純粋な子どもたちだ。どこか違う土地で電気を作っている人たちでも、それで仕事をしている人たちでもない。それを知っている人は、当時どれくらいいただろうか。

私たちがかつて住んでいたところが特別貧しかったわけではない。でも、資本力のある大きな企業によって開発され、電気のほとんどは、人の集まる都市で使われる。その環境負荷は過疎地域が受け持つ。私たち自身が、環境レイシズムとも言える当事者だったのだ。

環境正義。これは、人種差別や女性の軽視など、世界的な人権問題を解決するためには避けて通れない、重要な問題だと思う。では、どうすれば良いのか。風車をめぐる動きでは、地域の人たちが風車のデメリットを知らなかったことが大きかったと思う。

物事には必ず「もう一つの面」がある。私たちが今、良かれと思ってしていること、ためになると思ってやろうとすることが、どこかにいる全く知らない人を傷つけるかもしれないということを、いつでも気に留めていたい。まずは、「これが何のために、どうやって行われているのか。それによる、メリットとデメリットは何か。」と視野を広げることから始まるのではないか。何においても、正しい判断をするために。そして、しっかり知った上で持った意思是、人それぞれ。それを互いに共有して、主張して、心を広げていくことで、世界は必ず良い方向に進んで行き、誰もが平等で安全な生活を送ることができるようになる。そう、みんなが繋がっているのだ。

私は山梨に引っ越してきた理由を改めて知ることができて良かった。新聞、ニュース、本などで聞いてきた人権問題でつらい目にあってきた人たちへの視線も変わった。過去の課題を背負いつつ、夢と希望を持った若者たちが創っていく未来で私は、私たちの経験を、苦しんでいる人の助けになれるよう生かしていける人間になりたい。